



学校だより

ふうしゃ

平成29年6月13日
アムステルダム日本人学校
第9号
<http://www.jsa.nl/>



全校児童生徒による「彩」より

オランダの初夏を駆け抜ける

校長 尾後貫 智

6月12日、運動会後の初日。私は教頭先生と昼休みにグランドのゴミ拾いをしていました。ゴミは持ち帰ることになっていたにもかかわらず、残念ながらたくさんのゴミがグランドに落ちていました。私たちがゴミ拾いをしていると、それに気づいた小学部の子どもたちが数人私のところに寄ってきてゴミ拾いを手伝ってくれました。別に声をかけたわけでもないのに自分の意志でゴミを拾う子どもたちの姿を目の当たりにして、「子どもたちのこの心の豊かさはどこからくるのだろうか」と考えながら、いっしょにゴミ拾いをしました。昼休みは自由に遊びたいはずであるにもかかわらず、進んでゴミ拾いをする子どもたちの姿にただただ感心しました。そうしているうちに、中学部の生徒たちが掃除用具をもってきて手際よく落ちた枝葉を集め始めていました。

オランダの初夏の日差しの中で、「全力疾走 ～相手を追い抜き、勝利の道を駆け抜けろ～」のスローガンの下、第25回在オランダ日本人合同運動会が無事に大成功で終了しました。当日は、約1500人ものオランダの日本人の子どもたちとその保護者がアムステルダム日本人学校に集まりました。一番遠いマーストリヒト補習校から参加した人は、朝の5時過ぎには自宅を出てきたと聞きました。暑すぎず、寒すぎず時折日差しが顔を出す、絶好の天候に恵まれました。

昨年に引き続き、実行委員長の大任を拝しましたが、日本国大使館並びに JCC 日本商工会議所の全面的な支援の中で、各学校の運動会担当の皆様や、特に本校 PTA の皆様には、ボランティアで入口や会場の見回りや衛生管理をしてくださり、多くの皆様に支えられて実施できたことに対して、改めて感謝申し上げます。

保護者の皆様にとって、ご自分の運動会の思い出はどのようなものがありますでしょうか。私たち大人にとっては、「運動会」となると共通する大切な思い出を誰もが持っている

と思います。万国旗のはためく空の下で、お昼になると家族でお弁当を食べたことや、家族の声援を一身に受けながら競技をしたこと、またその中での喜びや悔しさなどです。これはまさしく日本の伝統的な教育文化と言えると思います。そのような大切な思いをここオランダの地でも子どもたちが体験できることが何よりもすばらしいと思いました。

保護者の皆様におかれましては、子どもたちの「走り」や演技はいかがでしたでしょうか。本部席よりそれぞれのレースを見ていても、子どもたちがスローガンにあるように全力でゴールを駆け抜ける姿に私はとても感動しました。皆様のご協力で、今年も素晴らしい運動会を実施できたことを共に喜び合いたいと思います。

今後の学校生活の中でも、子どもたちが色々なことを「全力疾走」で取り組めるよう支援していきたいと思いますので、ご協力をよろしくお願いします。



「日本の救世主になって下さい」

震災を振り返る記事の中でとても心に残った記事がありました。

平成23年3月11日、福島原子力発電所が津波により大被害を受けました。その災害復旧のために全国の電力関係企業から多くの人が救援に駆けつけました。ある59歳の方は40年間勤めてきた会社をその年の9月に定年退職を迎える予定でしたが、この事故発生を受けて会社が救援に行く社員を募ったところ、真っ先に志願しました。そのことを聞いた娘さんは当然びっくりし、心配しましたが「家では無口で頼りなく感じていた父親だったけれども、そのことを聞いて父を誇りに思った。涙が出そうになった」と述懐しています。出発の日には決死の覚悟で家を出る父親に対し、その日を特別なものにしたくないという思いから、普段どおり「行ってらっしゃい」と言って送り出したそうです。最初には行って欲しくはなかったけれど、もし何かあったとしても「自分で決めたことなら悔いはないだろう」と思い、無事な帰宅を願うばかりであったということです。そして奥さんは「主人は18歳の時から原発の仕事を続けてきました。一番安全なものの仕事をしてきたという自信があったのだと思います。これをきちんと処理しないと日本の将来の電力が心配だ、と言って出発しました。」と語っていたそうです。

もう一つの話は、同じく福島原発の放水作業に向かった東京都ハイパーレスキュー隊の隊長の話です。出発するにあたっては覚悟を決めていたと思いますが、いよいよ出発の場面で奥さんに携帯電話でメールを送りました。「それでは行ってくる」奥さんからはすぐに返信がありました。「日本の救世主になってください」というものでした。奥さんも「命にかかわる危険な仕事には行って欲しくない」というのが本音だと思えるのですが、その私情を押し殺して励ましたということなのです。

私はこの2つの話に触れ、彼らの自分に課せられた仕事に対する非常に強い責任感、誇り、自信を感じ目頭が熱くなりました。どれも原発災害復旧の話ですが、その他に共通していることは、本人の仕事に対する誇りとそれを理解している家族の誇りです。「日本の救世主になって下さい」はすごい言葉だと思います。

少し話が飛躍するかもしれませんが、私たちは保護者の皆様と共に21世紀の日本を背負う人材を育てています。いやもしかすると、世界を背負う人材なのかもしれません。そのような気概を持って子どもたちを育てていきたいと思っています。